

異文化間コミュニケーションと外国語学習

新 城 岩 夫*

INTERCULTURAL COMMUNICATION AND FOREIGN LANGUAGE LEARNING

Iwao Shinjo*

はじめに

現在、他文化の影響をまったく受けずに存在している国は世界のどこにもないと言ってよい。最近の急速な通信技術の革新は、人類の「地球文化」の到来を彷彿させるほどであるが、冷静に個々の国の人間の行動や国家間の関係に目を向けるならば、「地球文化」の誕生への道程は長く、険しいものであることを認めざるを得ない。

10年ほど前に、ハワイ大学・東西文化センターのピーター・アドラーは¹⁾、Beyond Cultural Identity: Reflections upon Cultural and Multicultural Man という題で論文を書いて、「新人類」(a new kind of man) の到来を告げ、(“a new type of person whose orientations and view of the world profoundly transcends his indigenous culture is developing from the complex of social, political, economic, and educational interaction of our time”), 文化的な意味での多国籍人の住む新しい世界の到来を期待したが、10年後の今日、地球上の人々の多文化性 (multiculturalism) の度合はどのように変化したのであろうか。

本稿では、今日の日本国民の間でもっとも関心のある課題の一つである異文化間コミュニケーションの問題を外国語教育と併せて考えてみたい。

第1章 文化の概念

文化の定義

人間のコミュニケーションを文化と切り離して論ずることはできない。コミュニケーションは文化を媒体とした人間のもっとも重要な活動である。これが異文化を理解し、その中に生きている人たちとのコミュニケーションにかかわっていく時のテーゼである。

まず、文化とは何か。日本人は文化をどのように捉えているか。現在、われわれの日常生活の

*外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences--Foreign Languages)

中で使われている「文化」および「カルチャー」という言葉は無数の意味に使われている。しかし、これらの用例を整理して分類してみると、二種類の定義におちつきそうである。一つは、「文化国家」、「文化的生活」、「文化人」、「カルチャー・センター」などの用例に見られるように、生活の中で時に豊かなもの、程度の高いもの（こと）、教養に結びつくものなどをあらわす。これに対して『広辞苑』のいくつかの定義の中の一つにあるように、「人間が学習によって、社会から習得した生活の仕方の総称。衣食住を初め、技術・学問・芸術・道徳・宗教など物心両面にわたる生活形式の様式と内容」²⁾という広い人間活動やその所産も文化である。文化研究の専門家は文化をどのようにとらえているのだろうか。

多くの文献で引用されてきたイギリスの人類学者、タイラーの古典的な文化の解釈はその後の研究に大きな貢献をしたが、彼は1889年に文化人類学の学術誌に寄せた論文の中で、「文化もしくは文明とは、その広範な民族学的意味において、知識、芸術、道徳、法律、慣習などのほか、人間が社会の成員として獲得した能力や習性の複合的全体にはかならない」³⁾と述べている。この定義を、その後の研究者たちの文化の解釈に照らして読みなおしてみると、文化は大きな二つの要素から成り立っていて、この二つの要素が相互依存的にはたらいって人類の文明が築かれてきたことがわかる。二つの要素とは、グットイナフの文化の解釈をかりると、

文化には二つの種類がある。第一の文化とは、一種の^{ホメオスタシス}自動調節システムとしての社会を特徴づける各種のパターンが繰り返されることである。そして第二の文化とは、人びとの知覚、判断、行動の基準である。さらに言えば、第一の文化は、人間が第二の文化を用いて作り出す^{アーチファクト}工芸品、ないしは成果にはかならない。個人は第二の文化の持ち主にはなりえても、第一の文化の持ち主になりえない。第一の文化は、一つの社会・生態系としての社会の共有財産なのである。⁴⁾

さらに言えば、グットイナフの「第一の文化」は、オズグッド等の「客体文化」(objective culture)につながり、「第二の文化」は「主体文化」(subjective culture)につながる。すなわち、人間によって作られた道具・機械類、衣食住に必要なさまざまなもの、美術工芸品、通信および輸送方法などの技術、ならびに明文化され、あるいは制度化された行動規範、对人的役割、育児や教育の方法、政治・経済制度の構造などの“観察可能”な人間の行動様式や問題解決方法を「客体文化」とすれば、「主体文化」は価値、思想、感情、態度、動機など、人間の心の中で発生し、環境にはたらきかけて「客体文化」を創造し、生産する“観察不可能”な非実体的(non-material)な人間の行為や精神作用を指す。言うまでもなく、これらの二つの「文化」はまったく無関係に独立して存在するわけではない。むしろ、ある社会の文化の体系を構成する要素となって重なり合いながらその文化特有の意味を創造するのである。

文化を個々の要素から成る統合的システムとしてとらえることは、文化を学んだり伝えていく時に特に重要な視点であるが(この問題については後でくわしく述べる)、言語学者の鈴木は、文化の構造性について次のように述べている。⁵⁾

文化の単位をなしている個々の項目（事物や行動）というものは、一つ一つが、他の項目から独立した存在ではなく、他のさまざまな項目との間で、一種の引張り合い、押し合い対立をしながら相対的に価値が決っていく。

文化学習

文化は学習によって人間が社会から獲得していくものである、とすでに述べた。人は生まれ落ちた時から、いろいろな方法でその社会の文化を学び、その成員として受け入れられていく。子どもの社会的発達過程を記述するのに「社会化」という心理学用語があるが、社会化が、「個人が集団ないしは社会のメンバーとして必要な知識、技術、素質などを獲得していく過程」⁶⁾と定義されるならば、文化学習の過程は社会化と同義である。文化人類学者は文化化（enculturation）とよんでいる。

文化化の内容や方法を簡単に言いきることはできない。教科書的な定義で、文化化とは、「特定の言語および非言語的行為を媒介して、特定の行動型を個人の内部に体制化していくこと」⁷⁾と表現する者もいるが、先に述べた文化の解釈に照らして文化化のしくみを考えてみると、それは個人が自分の生れ落ちた社会の価値や規範を、先人が築いた「客体文化」を通して主体的に学んでいく一方、社会も育児や制度的な教育を通して、基本的な生活習慣や技術を伝えていく相互的ないとなみであることがわかる。

江淵は文化学習のメカニズムについて、旧・文化とパーソナリティ（主にフロイト派精神分析学）と新・文化とパーソナリティ学派（主に認知心理学をその理論的基礎とする）の対立する知見を紹介して、前者が、文化学習を本質的に他人の行動の模写であるという立場をとるのに対して、後者は、文化の学習を「規則の探求・発見の過程」と捉え、学習者の積極性、創造性を重視する立場をとる、と述べた上で、ボックの、子どもの言語習得における積極性と創造性を強調する論文を引用して、後者の立場を補完している⁸⁾。

文化化の過程が、前者の言うように、他人の行動の模写を含んでいたとしても、その模倣行為の中には自分の意志による選択が含まれているのだから「模写」の中にはある程度積極性と創造性のはたらきがあるとみるべきだろう。江淵は次のように述べている。

子どもの模倣は、^{ミマ}応々にして個人の行動のたんなるコピーにすぎぬと見なされがちだが、仔細に見ると、それはもっと積極的な過程を含んでいる。子どもは他人の行動の中に、類似した場面における適切な行動として適用可能な「一般的行動モデル」となるものを見つけ出し、それを自分に出合う個々の具体的状況に応用しようとする。それは、いわば、帰納―演繹の理論を含む複雑な心理的過程から成っていると言えるのである。⁹⁾

結論的に言うと、人はその社会化、あるいは文化化の過程で、社会の要求する種々の文化要素と、自分の意志と判断に基づいた文化的価値や適応のための種々の行動パターンを身につけていく。

文化の学習には、これまでの議論の中心的内容を占めた母国文化の学習、つまり enculturation と異文化を学び適応していく過程、acculturation があるが、後者については次章で述べる。

第2章 文化とコミュニケーション、および異文化コミュニケーションの問題

コミュニケーションにおける文化の役割

すべての人間は自分の生まれ落ちた社会の文化の中で、普通はそれを意識することなしに生きている。同国人であるならば、普通、まったく見知らぬ者同士であっても、長年にわたって多くの人によって受け継がれてきた言語体系、知識、価値観、思想や信念、社会的役割やそれに応じた行動様式などを身につけていることを期待し、それを前提にしてコミュニケーション行為を行う。「コミュニケーションと文化は密接に関連しているので、人間の社会的相互関係もそのほとんどが文化とのかかわりを持っている。意識するとしないとにかかわらず、あるいは個人内・対人コミュニケーションのいかににかかわらず、われわれの文化背景がそれぞれの行動・反応に影響を及ぼしている。われわれには文化遺産・文化背景を選択する余地はほとんどない。われわれは文化といういわば鞆をいつも携帯していて、その文化的影響から逃避できない。」¹⁰⁾

人は個人的には外界の刺激を自分で選んで知覚し、評価し、価値判断を下して行動をする（その刺激にはたらきかける）と考えられがちだけれども、それはすべてその人の属する社会のシステム（＝文化）に基づいて行われるもので、文化はあらゆる人の行動を一定の枠にはめこみ、その行動の方向づけをする強い力を持っているのである。“No man is culture free”と言われるゆえである。

同じ文化を共有する社会の成員は、自他ともに、コミュニケーションの場面で、道を歩く時、自分の身体の移動を可能にしてくれる2本の足の存在に気がつかないのと同様に、自分の持っている「文化の鞆」に気がつかない場合が多い。文化は、個人にとっては、生得的にそなわったものではなく、学習によって獲得されたものでしかないが、その鞆の中の「文化」は常に自由に出入りしてその人の行動をコントロールしている。

異文化との出会い

普通の人が自分の「文化の鞆」の存在に気がつくのは、新しい環境などで、自分の行動が受け入れられなくなった時であろう。

鈴木孝夫教授は、東京で親しくなった米国人の言語学者で、イタリア系の婦人を妻に持つT氏の家に招待された時のことを次のように書いている。

或る日、アメリカの学者の習慣として、彼は多くの言語学関係の友人・知人を家に招待した。まずイタリア風のイカのおつまみなどで、カクテルを済ませた後、別室で夕飯ということになった。一同が席につくと、テーブルには肉料理やサラダなどが並べられ、面白いことに、白い御飯が日本のドンブリに

盛りつけて出されていたのである。

畳の上に座っていること、白い御飯であること、T氏たちが日本式生活を実行していることなどが重なり合って、一瞬私は、この御飯を主食にして、おかずを併せて食べるのだという風に思ったらしい。目の前の肉の皿を取り上げて、隣の人に廻そうとしかけた時、私はT夫人が、かすかにとまどったような気配を感じた。

間違ったかなと思った私は、御飯は肉と一緒に食べるのか、それとも御飯だけで食べるのかと訪ねると、夫人は笑いながら、先ず御飯を食べて下さいと言う。

私はその時、はっと気が付いた。この御飯は、イタリア料理では、マカロニやスパゲッティと同じくスープに相当する部分なのだと。¹¹⁾

鈴木教授のエピソードを長々と引用したのは、それが異文化間コミュニケーションにおける問題発生状況とそれに対応する時の人間の行動様式をよく示しているからである。同氏の知覚体系の中では、友人の家で目にした白い御飯はT夫人のとまどったような表情を見るまでは日本文化の構造の中で理路整然としてその文化的要素の役割を果していたのであるが（逆に言うと、白い御飯を見た鈴木教授は無意識のうちにはたらく自文化の規範によって御飯を主食と断じその尺度によって行動しようとしたのである）、御飯がイタリア式の食文化のシステムの中に置き換えられたとたんに異なった文化要素として同氏に向かったのである。その時、イタリアの食文化に精通していた鈴木教授は「異文化」である御飯の意味をイタリア文化の構造の中で正しく解釈することができたのだが。

プロッサーの、「コミュニケーションと文化には本来対立という概念が内在しているのが基本的な構図である」¹²⁾という指摘は注目すべき知見である。異文化間コミュニケーションの問題というのはつまるところ異なった文化を背負った二者のコミュニケーションが行きづまった現象だからである。プロッサーが彼の著書で引用するハーバード・サイモンズ（Herberd Simons）の説も、異文化間コミュニケーションの問題を解決する手がかりをあたえてくれそうである。つまり、コミュニケーションという手段を通してはじめて社会対立の概念が鮮明になり、対立の影響がどのように波及するかが解明され、また当事者とか第三者がいかに対立関係の阻止・統御・解消をはかったかがわかる、というのである。¹³⁾

社会対立の概念——くだいて言えば、文化や体制を異にする社会はなぜ対立するか、という大きな課題は人類の永遠の課題にも思える。しかし、二つの社会を対立させている文化の構造や、個々の文化の要素を解明することによって課題の解決に一步でも近づくことができるだろう。

カルチュア・ショック

異文化間コミュニケーションで大きな問題となるのがカルチュア・ショックである。カルチュア・ショックの概念や定義については、もっとも新しい論文では鍋倉（1987）が検討しているので¹⁴⁾、ここではその中の代表的な解釈をとりあげて論議を進めることにする。

星野はカルチュア・ショックを次のように説明する。

文化ショックは一般的には、個人が自身がもっている生活様式、行動規範、人間観、価値観とは多少少なからず異なる文化に接触した時の、当初の感情的衝撃、認知的不一致として把握されることが多いが、決してそれにとどまらず、それにともなう心身症状や、累積的に起こる潜在的・慢性的パニック状態である。¹⁵⁾

カルチュア・ショックの症状は、外国などに行ってまったく異質な文化の中である一定期間住めば多くの人が経験する。しかし時間が経過していくにつれて「症状」が消えていくのが普通である。

ダグラス・ブラウンはカルチュア・ショックを異文化受容の一つの過程として考えた方が妥当だと述べている¹⁶⁾。彼によれば、異文化受容 (acculturation) は四つの段階からなり、第一の段階では新奇な経験に直面してしばらく陶醉状態になって幸福感にひたる (euphoria)。次に、この新しい環境との蜜月の期間が終ると、だんだん文化のちがいを意識するようになり、異文化によって自分の安定感が揺らぐのを感じる。この第二の段階がいわゆるカルチュア・ショックである。この時期には苦境からのがれるために文化を共有する同国人に助けを求めたり、自分の直面している (外国の) 生活習慣や状態について不満を述べることで逃避しようとする。次の段階はカルチュア・ショックからだんだん回復していく時期である。いくつかの問題は残っているが、ゆっくりと、しかし着実に快方に向かう。理性的にも感情的にも自分をとりまいている状況のちがいを受け入れるようになり、対人的にも相手の気持ちに共感するようになる。第四の段階では、新しい文化を受け入れて、同化あるいは適応して、その文化の中で新しい人間として成長した自分に自信をもつに至る。筆者の海外在住中の観察でも、新しい文化を受け入れて健全な発達を上げていく外国人は上に述べた段階を経て適応していくことがわかる。

しかし中には第二の段階で止ったまま次に進もうとしない者もいる。表面的には異文化を受け入れているようでも、それは結局「客体文化」への消極的な同化であって、「主体文化」の受容にまでには至っていない。異文化間コミュニケーションが健全な形で行われるためには、相手の思想や価値観の正しい理解だけではなく、相手について感情移入 (empathy) ができなければならない。

日本人はカルチュア・ショックの度合いがひどいと指摘されることが多い。その理由について、中根千枝は、「日本人の場合、特にカルチュア・ショックがひどいのは、日本社会というものが同一民族で構成されており、島国で大陸にある国のように異なる文化をもつ社会と隣接していないため、自分たち以外のシステムが存在するということを、国内において実際に知る機会が皆無であるためである¹⁷⁾」と述べているが、米国で日本人留学生や海外駐在員とその家族の精神衛生とカウンセリングの仕事にたずさわってきた近藤裕氏も、カルチュア・ショックの日本人特有の要因として島国根性とそれによって生じた自文化中心主義 (ethnocentrism) をあげている。¹⁸⁾ しかし、実際には、カルチュア・ショックの度合いやそのあらわれ方は置かれた環境条件と本人の文化受容へのレディネスなどによって大きな個人差があるので、日本人のカルチュア・ショック

と島国根性および自文化中心主義との因果関係の一般化は難しい。

cross-cultural communication と intercultural communication

すでに述べたように、コミュニケーション行動と密接な関係をもつ文化に対する態度や理解の度合が（自文化と異文化を問わず）その人の対人関係やコミュニケーション行動パターンに重大な影響を及ぼすことは容易に想像することができるし、多くの事例研究が示している。

古来、日本人は異文化を受け入れる能力や心理的傾向（mentality）においては他民族に負けない民族だったことは歴史の物語るところである。近藤が、『カルチャ・ショックの心理』で、「一般的に言って、日本人は異文化に対する受容性がたいへん低い」¹⁹⁾と指摘したり、中根が「ヒマラヤ国境のチベット人の村長の方が日本のインテリよりもずっとカルチャ・ショックをうまく処理していた」²⁰⁾と書く時、筆者はわりきれないものを感じるのである。この問題を検討してみたい。

cross-cultural communication か intercultural communication か。日本の翻訳用語ではこの二つの英語に「異文化コミュニケーション」という言葉をあてる場合が多い。しかし古田（1987）も指摘するように²¹⁾、両者は厳密に区別して使用されるべきである。前者は「交差文化コミュニケーション」で文化の一方向的な流れを含むこともあるからである。後者は文化の相互的交流を意味する「異文化間コミュニケーション」である。cross-cultural communication に限定していえば、日本は古くから外国の文化とのかかわりは深く歴史も長い。しかし日本の文化の主体性を相手に伝えながら言葉の正しい意味において文化の交流を通したコミュニケーション（対話）をしてきたとは言えない。

日本人の自文化中心主義（ethnocentrism）が、基本的には、日本が島国であるという自然環境と、単一民族であるという社会的要因に起因することは多くの人が認めるところである。それでは、外国との接触にとってネガティブなこの二つの要因が何らかの方法で取り除かれ、異文化と接触する機会が多くなれば、異文化間コミュニケーション（intercultural communication）の壁はなくなり、日本人の異文化への適応は向上するのだろうか。

日本人特有の異文化問題を特にコミュニケーション行動の観点から研究してきた言語学者やコミュニケーション学者は、日本語の表現構造や様式をさぐることによって日本人に特有なコミュニケーション行動を解明しようとした。バーンランドの労作『日本人の表現構造』はその代表的研究であるが、その中には、日本人とアメリカ人の表現構造のちがいが、「公的自己」と「私的自己」という概念を軸にして克明に述べられている。²²⁾

バーンランド教授は、他人に明かす自己の部分、つまり公的自己と、他人に明かさない自己の部分、すなわち私的自己は日本人とアメリカ人では異なる——日本人の公的自己は米国人のそれよりも小さく、私的自己は逆に大きいという仮説を立てて、日米両国の大学生240人を対象に調

査した。その結果は、種々の調査項目を通して仮説が支持され、日本人はアメリカ人に比べて、より表面的にコミュニケーションを行い、もっとも親密な知り合いとでも、私的な体験を話し合う程度がかなり少ないのに比べ、アメリカ人はより広い範囲の話題項目にわたって、かなり深く個人的な段階にまでコミュニケーションを行うらしいということだった。

この研究の示唆するものは、日本人の異文化コミュニケーションにおける不適応現象が、単に島国根性や自文化中心主義だけでは説明できない（因果関係はあるにしても）根の深いものであること、そして、それは多くの場合、文化を異にする人とのコミュニケーション場面で、日本人の表現行動の中に対人関係を損い、誤解をまねくおそれのある要素が少なからず含まれているであろうということである。

「以心伝心」という言葉で表わされるように、言葉以上に言葉の背後に隠されている心情面での理解を重視する日本人と、言葉によって表現される論理性を重視し、議論や対話でコミュニケーションの障害を取り除こうとする欧米人との摩擦は必然的な結果とさえ言える場合が多い。このような問題は、単に外国人との接触を多くしたり、異文化についての知識を増やすことだけでは解決できないだろう。

ハワイ大学のデニス・オガワ（1979）は、ホノルルやロスアンゼルス、ニューヨーク、シアトル、サンフランシスコなどに住む日系人のコミュニケーション行動を調べて、アジア系アメリカ人の行動体系の重要な要素に、家庭やそれを取りまく社会的役割の中で培われた孝行心、「家」の名誉・恥・面子などを重んじる東洋的な属性（oriental attributes）があることを観察し、これらの価値観は都市化かアメリカ文化の受容などによって変革していくだろうという一般的な予想に反して日系人の中に根強く残っていて、他の民族グループ間とのコミュニケーションにも重大な影響を及ぼしていると報告している。²³⁾

第3章 外国語学習と異文化間コミュニケーション

はじめに

今日わが国ではあらゆる分野で「国際化」の波にあらわれている。通信技術の革新と流通手段のかつてない構造変化は、異文化との接触を日常的なものにし、外国に行かなくても文化を異にする人たちとのコミュニケーションの機会は増大している。

このような社会変化はあっても、前章で指摘したような種々の問題をかかえた日本人の異文化間コミュニケーションの状況は楽観できるとは言えない。ルース・ベネディクトが未解決の問題として投げかけた「20世紀の障害の一つは、日本を日本人の国たらしめているものは何であるか、というだけではなく、アメリカをアメリカの人の国、フランスをフランス人の国、ロシアをロシア人の国にしているものは何かということについて、まったく漠然とした、非常に偏見のある概念しかもっていない、という点である」²⁴⁾という大きな課題はまだ十分に解決されてはいないが、たとえこの問題が解決されたとしても（実際、われわれは世界の国々について「漠然とした、非

常に偏見のある概念」ではなく、文化人類学が提供した多くの資料やマス・メディアを通じて、ベネディクトの時代には想像も及ばなかった豊富な知識をもっている）今日、日常的に体験する異文化間コミュニケーションの問題を解決できるだろうか。

バーンランド教授が、研究の結論を普遍的であると主張したり、一つの事柄を実証すれば、それがすべての説明になると思ったり、事柄を単純化しすぎないように……など、自分の研究結果には慎重な態度をとってはいるものの、『日本人の表現構造』が提起する日本人のコミュニケーション行動の問題は、今後とも続けて究明すると同時に、外国人とのコミュニケーションをどのように改善すべきか、具体的な問題解決の方法を見つける努力をすべきである。

日本における外国語科の価値、その文化的考察

十余年前にある出版社が、「1980年代に向かったの学校教育再建の基本的方法論をバックにした『現代教科教育学大系』というシリーズ」を刊行した。²⁵⁾当然、外国語教育（英語）の章も含まれている。担当の著者は、スチュアート（Stewart）の『言語の社会言語的分類』（Sociolinguistic Classification of Languages, 1962）を論考している。

まず、スチュアートは言語をその機能によって次のように分類する。²⁶⁾

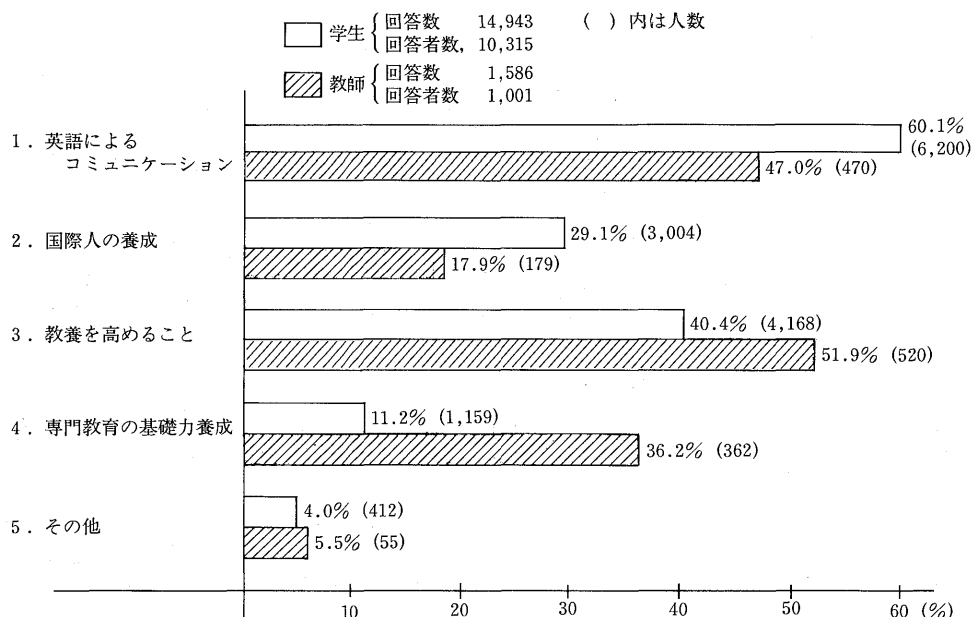
- ①公用語（official）：あらゆる政治的・文化的目的のために、法律により正当と認められている言語。
- ②集団用語（group）：ある民族の中の特定の人種的・文化的集団の成員のみによって使われる言語。
- ③広域伝達用語（wider communication）：一つの民族がいくつかの言語集団に分かれている場合、主として商業用の目的をもって使われている共通言語。
- ④教育用語（educational）：主としてある水準の教育の場において、伝達的手段として使われる言語。
- ⑤文学用語（literary）：主として文学的あるいは学術的目的をもって使われる言語。
- ⑥宗教用語（religious）：宗教的目的をもった諸行事に使われる言語。
- ⑦専門用語（technical）：国際的な科学文献のために使われる言語。

上の分類によると、日本で学ぶ英語は、結局、わずかに専門用語にはいるだけで、総合的に言くと、「日本人が外国語、特に英語を学習して得られる価値は、外国に行った時に役立つこと、および、国際的な科学文献を読み書きする時に役立つこと、の2点に限られることになる」ということである。²⁷⁾このような観点から、この著者は短絡的な言語の機能分類に対して警告し、「日本の外国語教育にはもっと内面的な別な価値がある」²⁸⁾と述べている。しかし、「内面的な価値」については、「外国語を通して日本の文化が急速に発達し、日本人の視野が広がったという教養的あるいは内面的な価値を見落してはならない」²⁹⁾という表現以外にはくわしい説明はなされていない。

大学の教養課程で教えられているいわゆる一般英語の目的について、大学の英語教員にアンケート調査を行った結果も、「教養を高めること」がもっとも多かったことが報告されている。³⁰⁾この目的を達成するための手段として解答者の多くは「リーディング」に頼っていることが同調査で分ったが、一方、同研究会が学生に対して行った調査で、学生側から見た一般教育の英語学

習の目的は、「英語によるコミュニケーション」がもっとも多く、図に示すように、学生と教師の間に大きな目的意識のずれがある。³¹⁾

図1. 一般英語の学生の目的と教師の目的



大学「一般英語」教育実体調査研究会編『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(Ⅱ)－学生の立場－』

筆者が1987年度の学年初めに、236人の私立大学の学生を対象にした目的意識調査でも、図の中にある調査項目「英語によるコミュニケーション」に相当する「日常的な会話を聞いてわかる」「日常的な会話や海外旅行などで話せるようになりたい」という皮層的な解答(記述式)がもっとも多く、筆者を含め多くの大学教員が望んでいる「ことばを通して他の文化を学んで教養を高め、文化を異にする他国の人と深い交流(communication)ができる」という目的意識とは大きなずれがある。大谷は、このような現代の英語学習者のニーズに理解を示しながらも、「教育(・研究)機関として、あるいはプロの語学教師としては、まず学習者の“ニーズ”そのものの当否を自らの手でチェックする重要な機能を持ち、その結果を学習者に投げ返す責任をもたなければならない」と述べ、さらに、「そのチェックの尺度となるのはいうまでもなく、英語文化圏とは異質のこの国において、社会教育ならぬ学校教育で、第2言語ならぬ外国語としての言語を、幼児期をはるかに過ぎたいわば adult beginner としての学習者に対して、さらに国民的な規模で、しかもごく限られた時期と多人数クラスで行う英語教育が、それ自体としてもつ本質的なニーズ」

であるべきだという難題を投げる（傍点は引用者）。³²⁾

しかし、英語学習に対して、いわば「うわべ」のニーズを表明する学習者も、現代文化という社会的な枠の中で生きており、文化要素の中でもっとも重要な言語に対する価値判断に基づいて英語言語の“効用”を捉えているとも言える。従って“ニーズ”の当否のチェックは、学習者が携帯している「文化の鞆」に始まり、英語がわが国で果たしている文化的要素の機能分析とのクロス・チェックでなければならない。

第1章で文化学習について述べたが、文化はその時代の求める価値や思想を核にして新しい要素を増やして広がり変容していく。本章の冒頭に述べた社会の変遷と、英語という異文化の要素が日本文化の中にとりこまれていく今日の状況を見ると、日本の教育制度の中における外国語科（特に英語）の価値は、現在通念的に考えられている「教養」だけでは包摂しきれない力と広がりを持つに至っている。

社会の成員として人が学んでいく文化の個々の要素は元来、実用的価値の高いものである。その中でも言語の実用性は最も高い。子どもが母国語を驚異的な速さで習得していく能力の源泉は、社会的動物である人間の文化化への限りない意欲にある。つまり子どもは、親や周囲の人たちとの連帯感を母国語の習得を通して強めていく。その過程で、子どもは言語の効用を学ぶ。逆に、その連帯意識への欲求や、言語の効用の認識が母国語習得への大きな動機としてはたらく。このことに注目して外国語（第2言語としての）習得の態度や動機について研究した人たちがガードナーとランバート³³⁾、そして彼等の研究を検証あるいは発展させた他の多くの研究者たちだが³⁴⁾、彼等は外国語学習とその学習動機としての文化帰属願望（“a learner's desire to be like representative members of 'other' language community, at least vicariously, with the other community”）との関係を統合的動機（integrative orientation）という概念で捉えて研究した。要約すると、上述の文化帰属願望、つまり学習者が対象言語文化圏の一員ようになり、その文化に同化したい、という態度や願望がその言語の習得に有利な影響を及ぼす、という仮説の検証である。

今日の多くの日本人が英語の効用を外国人とのコミュニケーションに求め、その要求に応えていない英語教育に不満を抱いている事実は、変容する日本文化の中での英語言語の役割の変化に対する文化的反応と言える。つまり、以前は西洋の文化を導入するための媒体としての役割が主だった英語が、コミュニケーションの道具として、その役割に大きな変化が生じたことによって、新しい文化枠の中で生きようとする日本人にとっては単なる異文化の要素としてではなく、自国文化の要素にもなりうる身近なものに思えるのである。しかし、ある特定の言語を第2言語として学ぶ学習者のように、英語言語圏の文化に対して帰属願望を持ちえない日本人学習者は、今日の日本文化における英語の役割を特定することはできない。

前掲の『適応の条件』に、「外国語の習得と文化の関係」という一節があるが、その中で中根は、日本人が外国語ができないのは、外国語教育の欠陥よりも、日本人に意欲が欠けているからだと言及し、さらに、意欲が無いのは、その必要ならびに効用が充分認識されていないからだ、と述べている。³⁵⁾

外国語教育の役割は、対象言語の発音、文の構造、語法などの解説だけではなく、学習者が自文化の中では意識しない言語と文化の関係、文化を異にする人とのコミュニケーションの問題点とその解決の方法、そして演習を通したコミュニケーション技術の習得をめざしたものでなければならぬ。これらを通して外国語の真の効用が認識され学習意欲につながるのである。

むすびにかえて

1

筆者が初めて正式に母国語話者から英語を習ったのは大学に入学した時であった。教師の体から発散する「アメリカ文化」を全身で受けとめながら英語を学んだ。机の上に座って講義をするN教授の姿には最初は抵抗があったが、それも明け広げなアメリカ人のコミュニケーション・スタイルとして受け入れるようになった。何人かの外国人教授（主として米国人）の講義を大学4年間を通じて聞いているうちに、初めは異様に思えた身ぶりや、高笑いや、顔の表情がやがて自然にみえ、それらのいわゆる non-verbal なコミュニケーション行動を伴わない英語を聞くのは想像するだけでもおかしかった。講義の内容は決して「アメリカ文化」ではなかったが、われわれ学生たちはいつの間にかアメリカ人の表現方法を学び“アメリカ文化”を吸収していった。そして多くの者がアメリカ文化を愛するようになっていった。そして日本文化への関心も深まった。異文化の習得とはそのようなものだろう。

2

大学を卒業して英語教師になった。教壇に立って、大学在学中に教えられた外国人恩師たちの表情やしぐさを思い出しながら英語を話した。学生が大笑いした。教室に入り、英語を話し始めると、いつもの自分とはちがって声が大きくなったり、思わず身ぶりを交ぜて話していたりするのである。外国留学から帰ってくるとその傾向は強くなり、教室で接する私は学生にとっては“変人”に見えることもあったようだ。そういう eccentric な教師のしぐさは学生の間に二つの反応パターンを生んだようだった。好感と不快感あるいは明らかな拒絶。当然のことながら、前者は概して英語が好きで、異国の文化に旺盛に興味をもっている者に見られ、後者はその逆である場合が多かった。外国語学習は一種のカルチュア・ショックであると考えられるようになった。この問題を理論的に解明したいと思って Gardner と Lambert の研究（注34）を手がかりに「統合的動機」（integrative orientation）について数年間取り組んだ。新しい文化に心を開き、知的好奇心をいっぱいふくらませて新しい体験を待ち受けている人にとっては、他の多くの日本語による日本的な授業とは明らかにちがった英語の授業は eccentric な異文化の漂う小さな世界であろう。しかし、日本の多くの学校ではこのような世界を造りかねる困難な問題が横たわっている。“……………

"many English speakers of English teaching in Japanese schools and colleges severely criticize our English classes in action to the effect that the subject studied in many high school and college English courses is not English but Japanese, since readings are translated into Japanese, lectures and discussions are in Japanese; in short, English is for all practical purposes banned from the classroom, as surely as if we issued a decree: 'English is forbidden here'."³⁷⁾

異文化に目を開き、それを理解した上で、お互いの文化を尊重しながらコミュニケーションする、すなわち異文化間コミュニケーションの基礎を養うことが外国語教育の本来の目的だと考えるのだが、外国語学習以前に、他文化に背を向け、異質のものに心を閉ざして受け入れようとしないパーソナリティをすでに宿している学習者の心を開いていくことや、そのための外国語教育環境条件を改善していくことも外国語教師の大切な役割であると考ええる。

日本人外国語教師が対象言語圏の文化すべてを教えることは不可能である。しかし、その文化と切り離すことのできない言語の知識をもち、その言葉話す人たちと接触する可能性の多い立場にあることは事実である。外国語は単なる言語コードとしてではなく、生き生きとした文化背景の中で、つまり文化の重要な要素として教えられるべきであり、それには教師自身の異文化体験の裏付けが望ましい。教師は自分の異文化体験を生きた教材として語ることができるからである。前掲の鈴木教授の体験のように。（注11、付録も参照）

〔注〕

- 1) Adler, P.S. "Beyond Cultural Identity: Reflections upon Cultural and Multicultural Man." In Brislin, R.W. (ed.) *Culture Learning*. The University Press of Hawaii. 1977. p. 25.
- 2) 新村出編 『広辞苑』 岩波書店, 1973.
- 3) 田中靖政 「現代の日本人の主体文化」 『講座 現代の心理学 文化と人間』 小学館, 1982より引用。 p. 124.
- 4) *ibid.* p. 128.
- 5) 鈴木孝夫 『ことばと文化』 岩波書店, 1973, p. 4.
- 6) 東洋, 他編 『心理学の基礎知識』 有斐閣, 1970, p. 220.
- 7) 星野命編 『人間と文化』 朝倉書店, 1982, p. 121.
- 8) *ibid.* pp.118-133
- 9) *ibid.* p. 123.
- 10) Prosser, M.H. *The Cultural Dialogue: An Introduction to Intercultural Communication*. Maughton Mifflin Company (岡部郎一訳 『異文化とコミュニケーション』 東海大学出版会 1982, pp. 24-25)
- 11) 鈴木, pp.1-2.
- 12) Prosser (岡部訳), pp. 24-25.
- 13) *ibid.* p. 25
- 14) 鍋倉健悦 「異文化コミュニケーションにおけるカルチュア・ショック」 『独協大学 外国語教育研究』第6号, 1987.
- 15) 鍋倉 (1987) より引用。
- 16) Brown, D.H. *Lerning a Second Culture*. In Valdes, J.M. (ed.) *Culture Bound: Bridging the Cultural Gap in Language Teaching*. Cambridge University Press. 1987. p. 36.

- 17) 中根千枝 『適応の条件』 講談社, 1972, p. 14.
- 18) 近藤裕 『カルチュア・ショックの心理』 創元社, 1981.
- 19) *ibid.* p. 121
- 20) 中根, p. 14.
- 21) 古田曉監修 『異文化コミュニケーション』 有斐閣, 1987, p. 6.
- 22) Burnlund, D.C. *Public and Private Self in Japan and the United States*. 1973 (西山千訳 『日本人の表現構造』 サイマル出版会)
- 23) Ogawa, D.M. Communication Characteristics of Asian Americans in Urban Settings: The Case of Honolulu Japanese. In Asante, M.K., E. Newmark, and C.A. Blake (ed.) *Handbook of Intercultural Communication*. SAGE Publications. 1979. pp. 321-237.
- 24) Burnlund (西山訳) より引用。
- 25) 倉沢栄吉, 他編 『現代教科教育学大系 2 言語と人間』 第一法規, 1974.
- 26) *ibid.* pp. 167-168.
- 27) *ibid.* p. 168.
- 28) *ibid.*
- 29) *ibid.*
- 30) 大学「一般英語」教育実態調査研究会編 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(I)——教員の立場——』 1983.
- 31) —— 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(II)——学生の立場——』 1985.
- 32) 大谷泰照 「学習者のニーズに直結した英語教育」 『英語教育』 VOL. XXXIII, No. 1, 1984, p. 8.
- 33) Shinjo, I. Individual Differences in Foreign Language Learning. 『豊田高専紀要』 VOL. 10 1977, p. 92.
- 34) Gardner, R.C. and W.H. Lambart. *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Newbury. 1972.
- 35) 中根, p. 98-70.
- 36) 大学「一般英語」教育実態調査研究会編 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(II)——学生の立場——』 1985, p. 115.
- 37) Sato, H. English Education in Japan: With Special Reference to College Entrance Examination. 『名古屋学院大学外国語教育紀要』 No. 15 1986, p. 89.

付録 (教材, 1986, 1987)

MY CROSS-CULTURAL EXPERIENCES (1)

Iwao Shinjo

One day in my early childhood, a crowd of American soldiers marched into my village. The villagers were all surprised, standing still on both sides of the narrow road to see the strangers. They were the soldiers who had fought and won the great war against Japanese, leaving Okinawa unguarded and separated from the mother country.

Okinawa is one of the island prefectures of Japan, which is situated about 350 miles away from Kyushu. It was not until well into the period of my elementary school age that I learned my home island had been inhabited by foreigners, and what the surprising march meant. They were, in fact, the conquerors who were later on to govern the island and its people without a mother country. At the time I was too young to understand

what was going on in the world: Japan had lost the war, suffering from the great loss of many lives and cities which had been burned down to ashes; Okinawa was only place on the land of Japan where the bloody fighting took place, leaving both Japanese and American people dead.

The conquerors had began to build a military base on the island, and we got accustomed to the sight of the young foreign soldiers in a huge truck zooming past in a cloud of dirt. We were first frightened at strange looks of those big men whose eyes, noses, and hair were all different from ours in color and size.

Time went by, and by the late 1950's, when I entered university, I had fully realized what my homeland Okinawa was really like. It was no longer Japan, but a dismembered fraction of land inhabited by tens of hundreds of foreigners, and governed by the U.S.A whose capitol was situated across the Pacific Ocean some 6000 miles away.

The small island experienced a sudden and immense culture shock, which caused the people to suffer from a cross-cultural conflict. There were many crimes and violations by young foreign soldiers. The US goverment imposed upon the people the law which were not always welcomed by them. The country which produced the great man known for his great speech, "government of the people, by the people, for the people", was making a goverment which was against the will of the Okinawan people.

The US occupation of Okinawa brought me such a dark side of cross-cultural experiences. However, I should not forget to tell the other side of a coin, on which was painted a beautiful picture of a racial contact.

While I was at university, I met many Americans who tried to seek friendly relations with the islanders. They were well-educated people who were interested in the life and culture of Okinawans and visited the people who would offer to help them. That's why they came to my university to study Japanese culture as a student or a guest.

Mr. Brown was one of such students who attended some of our English literature classes, where he also learned Japanese. English classes taught by Japanese professors were very helpful for him to learn Japanese. In class, he was sometimes asked to read the text as a model, which pleased us very much.

I remember a happy year in my college life when I played an English drama, in which I acted "son-cho san" (chief of villagers), Mr. Brown an American soldier who had fallen in love with a Japanese geisha girl. It was a great success, and we were invited to play in the American-Okinawan Cultural Center and in the theater at one of the US military bases in Okinawa.